

理科学習における話し合いと意味生成の研究 (3) —オーバーラップの機能と発生メカニズムからの考察— Turn-Taking System in Science Class

○久保田善彦^A 西川 純^B

KUBOTA Yoshihiko^A NISHIKAWA Jun^B

上越教育大学大学院^A 上越教育大学^B

Graduate School Joetsu University of Education^A Joetsu University of Education^B

[要約] 小グループでの話し合いとそこでの意味生成を、発話の順番取り(Turn-Taking)から分析すると、オーバーラップ発話が共同での意味生成に関与していることがわかる。オーバーラップの機能とその分類、更にはオーバーラップ発生の条件とメカニズムを明らかにした。

[キーワード] 話し合い、意味生成、会話分析、Turn-Taking, オーバーラップ

1 研究の目的

理科学習では実験・観察を中心に多くの話し合い活動が行われている。そこで子どもたちは、どのようにに関わり、どのようにに共同で意味を生成(学びを深める)しているのだろうか。

本研究では、会話分析の手法である Turn-Taking (発話の順番取り) の視点から、理科学習における共同での意味生成の一端を明らかにすることを目的とした。

2 研究の方法

茨城県の公立中学校 第2 学年および第3 学年を対象に、通常の理科学習において小集団の会話をテープレコーダーに、教室全体の様子を VTR に記録した。調査期間は、平成 13 年 10 月～12 月および平成 14 年 6 月～7 月である。

3 オーバーラップ発話とは

教室内での話し合いは、発話の終了後に次の話者が発話する「単独発話」と、第一発話途中で次の話者が話しを始めてしまう「オーバーラップ発話」(同時発話・集団発話などともよばれる。)に分類することができる。以下の報告では、オーバーラップ発話に焦点を当て、意味生成システムとの関連から分析を進めた。ここでのオーバーラップ発話には、発話の重なりだけでなく、第一発話終了と同時に第二発話が始まる場合も含めた。

話し合いに関する実践書の多くは、話し合いのルールをあげ、その一つとして、最後まで人の話を聞くことをあげている。子どもへの意識調査からも

同様な結果が出ているため、多くの教師や子どもが認めているルールと考える。

発話の順番取りシステムを提唱した Sack(1974)らによると、オーバーラップはルール違反であり、通常の会話ではオーバーラップは最小になるように組織されるとしている。Ervin-Tripp(1979)は、オーバーラップは全体の 5%未満になり、もしあったとしても非常に短いものであるとしている。Levinson(1983)は、オーバーラップを、偶然の重なり(発話開始時の競合)や、暴力的な割り込みとしている。このようにこれまでオーバーラップ現象は、会話規則からの逸脱や偶然的に生じたものと捉えられてきた。

しかしながら授業中の話し合いでの総発話数(4 課題、約 2000 発話)におけるオーバーラップ発話数を調べると、34%ものオーバーラップが見られた。榎本(1999)は、実験室的条件であるが、日本語地図課題において 45%のオーバーラップが発生していると報告している。この割合は、偶然の重なりや暴力的発話として処理しきれない現象である。

オーバーラップ現象が起こる場面では、下の事例のように共同での意味生成が見られる。オーバーラップと意味生成の関連を見るために、総発話に対するオーバーラップ発話の割合を班ごとに比較した。すると、活発な意見交換が行われ共同での意味生成が数多くある班の方が、話し合いが成立していない班より高い割合でオーバーラップをしていた。

これまでの話し合いは、“話し手”“聞き手”の二

オーバーラップ発話の事例

＜静電気は電子の移動によるものであることを学習した後に、ハク検電気のハクが開く理由をワークシートに図解しながら話し合っている様子である。＞

1. A: これをこうするとマイナスが・・・

2. B: //ここまでマイナスが流れて・・・

3. C: //マイナスが流れてこれがマイナスになったから反発する

分法に基づくルールによって支配されていた。しかし話し合いの中で、オーバーラップが高い割合で発生し、意味生成にも関与しているということは、先の二分法から脱し、「話し合いは動的な相互作用である」と捉え直す必要がある。

4 オーバーラップ発話を分類する視点

オーバーラップは、意味生成とどの様に関連しているのだろうか。オーバーラップを分類することで、その機能の明確化を試みた。

話し合いが成立していない班の会話の特徴は、発話者の発言を認める言葉やうなずきがない。発話者の意見が途中で詰まったときに、そこまでの発話を認めることも、話者をサポートすることもない。岡田(1997)の会話は「意味を与える(認める)」「意味を伝える」の2つの機能を配分しながら行うとの視点に立つと、意味を伝えるだけでなく、意味を与える機能が働いていないと、意味生成には繋がらないと考えられる。

これまでオーバーラップ発話の分類は行われてきたが、実態とかけ離れている、会話を発言権のやり取りとして考え、相互作用の観点が足りないなどの問題があった。本研究では、“会話は動的な相互作用である”ことと、先の“発話の2つの意味機能”からオーバーラップを4つに分類した。

うなずきなど、発話に意味を与えるオーバーラップを“協調型OL”とした。第一発話を利用しながら(発話に意味を与えながら)自分の意味を伝えるオーバーラップを“共同型OL”とした。Levinsonのいう偶然的開始の一致や暴力的介入は、意味を伝える機能のみと考え“単純伝達OL”とした。上記の分類に当てはまらないものを“その他”とした。全オーバーラップのうち協調型が51%、共同型が38%であり、この2つの分類で全オーバーラップの9割を占める。

5 オーバーラップ発話の分類と機能

オーバーラップの大多数を占め、意味生成に関連が強いと思われる“協調型OL”と“共同型OL”の機能を考察した。

協調型OLは、相手の発話に意味を与える働きがある。また、第一発話者に自分の能動的参加を明示する発話ともなる。これによって会話を促進する働きとなる。①あいづち(うなずき、感嘆)②復唱③催促④質問-返答などが見られた。協調的OL、特にあいづちなどは、様々な能動性のレベルがあり、単純に能動的参加の指標とはできないが、関連があり、共同での意味生成に与していると考えられる。

共同型OLは、第一話者の発話に意味を与えなが

ら第二話者が意味を伝える発話である。共同型OLは、共同による意味生成が行われやすい。その分類は、第一発話を活用し、つまり言葉を借りて新たな意味を作る①引用、相手の言葉は借りずにアイデアを借り、あたらたな意味を作る②関連、第一発話の意味が曖昧な場合に、多くが理解できるようにする③補完(確認・補足)、相手の意味を問い直し、新たな意味を作る④訂正(直接訂正・懐疑)などがある。

①引用は、相手の意図する発話を先取りして述べる(7)先取り完結、と第一発話者の不安を読みとり、助け船を出す(4)助け船に分かれる。助け船は、「えっとー」などのフィラーによる内部検索(串田,1999)時のオーバーラップも含む。先取り完結をされた子およびした子に印象を聞くと、どちらも言葉遊び感覚で一体感を楽しんでいるようであった。協調型OLと機能的に近いと考えられる。助け船オーバーラップについて訪ねたところ、第一話者は不快感があることはあまりなく、答えがわからなくても誰かが助けてくれることに安心感を感じていることもあった。助け船は、共同での意味生成が行われるだけでなく、発話者に安心感を与えることで、話し合いを活性化させることに寄与していると考えられる。

6 共同型OLの発生の条件とメカニズム

共同型OLによる意味生成は、以下のように発生すると考える。学習者が、課題解決に能動的に参加するなかで、他者の思考を追体験しようとしながら他者理解を進めることで、成員間の間主観性(一体感・共感)が生まれる。その結果、他者への“成り込み”が生じ、共同型OLが発生する。

共同型OLが発生する条件等については、当日に報告する。

引用文献

- ・Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language*, 50(4), 696-735
- ・Ervin-Tripp, S. (1979) Children's verbal turn-taking. In Ochs, E. & Schieffelin, *Developmental Pragmatics*. 391-414. New York: Academic Press.
- ・Levinson, C. S. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- ・榎本美香(1999), 重複発話現象に基づくターンテイキング理論の見直し〜日本語地図課題対話を通して〜, 音声言語情報処理27-3
- ・岡田美智夫 鈴木紀子 石井和夫 犬童早苗(1997), 共同想起対話における間身体的な場について, 信学技報, SP97-56
- ・串田秀也(1999), 助け船とお節介, 会話分析への招待, 世界思想社

1年生に行った意識調査では73%が「話し合いでは、考えはまとめてから発表すべき」としている。これは、正答偏重文化(川合,1998)の影響が強いと思われる。一方、3年生は、61%が「考えの途中で発言してもよい」とし対照的な結果となった。小集団の話し合いで、思考過程を表現するか否かは、教室文化の差として存在していると思われる。ピゴツキー(1932/1976)は、「思想は表現されるのではなく、言葉で行われている。」と言っている。オーバーラップによる意味生成は、言葉による思考過程が複雑に絡みあった状態だと考えると、思考過程を表現する文化がオーバーラップの発生には、必要であると考えられる。更にオーバーラップで助け船機能が働くことは、安心して思考過程を表現できるため、思考表現文化をより促進する働きとなる。

F.エリクソン(1999)は認知的難易度の高い課題では、話し合いのルールが変化し、教室内でオーバーラップが可能になるとしている。オーバーラップによる意味生成は、課題に適度な難易度が必要であり、教師は学習者に合わせた課題をデザインすることが大切である。

2, 理科教育学会

<オーバーラップの機能と分類>

(1) これまでのOLの分類

(2) 話し合いが成立していない2例の提示、認めてくれない、サポートしてくれない

意味を伝えるだけの話し合いではなく、意味を認める。または意味を認めながら伝えることが、話し合いには必要だろう。

(3) OLの分類

① 協調OLの分類とその意味

② 共同OLの分類とその意味、一体感、助けられる、わからなくても発言できる・・・○×グラフの説明、フィラー(グッドウイ)

3, 科学教育学会

<何がオーバーラップを起こしているのだろうか>

(1) 思考表現文化(発話しながら考える)

① 浜田・ピゴツキー

② 文化の必要性(アンケート)

③ 自己モニタリングについては、備考に入れる

(2) 課題の妥当性+能動的参加

①テーマとOLの差、今年度の調査から

(3) 間主観性(一体感・共感)→他者への成り込み

① あいつち後の反応

② 相づちのレベル